学校だより
# 希望の鐘
ひとつのつぼみはいちどしかひらかない

八戸市立
小中野中学校
平成３１年２月１３日（水）
No.146 文責：校長 工藤聡

## いっちー　天国へ ～動物を飼うという責任～

２月８日の朝、仙台市に住む息子から電話がありました。私が電話しても、なかなか１回でつながることはありません。そんな息子が電話してくるのは珍しく、しかも朝だったので「何か起こったかな？」と心配して電話に出ると、案の定（アンノジョウ：思ったとおり）「ネコのいっちーが死んだ」ということでした。詳しく事情を聞くと、『昨日仕事を終えて夜遅く帰ると、いっちーが窓際で手足を伸ばした状態で倒れていた。あわてて、深夜も診てくれる動物病院をさがしてつれていったが、もう息をしていなかった』というものでした。

いっちーは、雑種で白・黒・グレーの毛のオスのネコで６歳です。人間で言えば、40歳くらいになるでしょうか。名前は「いちご」なのですが、オスなのでいっちーと呼んでいます。息子は、幼い時から動物を飼いたいといつも言っていましたが、私が動物を苦手（犬に噛まれそうになったことがある）だったこともあり、許可できませんでした。せいぜい、金魚を飼ったくらいです。息子は、５年近く前の３月に大学を卒業し、大学そばのアパートから職場近くに住居を決めることになったのですが、新しいアパートの家賃がどう考えても相場（ソウバ：一般の社会における物の値段のこと）よりはるかに高いので不審に思って聞いたところ、実はペットと同居できるアパートだと白状（ハクジョウ：自分の隠していたことを言うこと）したのでした。いっちーを飼うことになった発端（ホッタン：起こり）は、当時のアルバイト先の人に、動物病院で産まれた子ネコが５匹いるので誰か引き取ってもらえないかと言われたことだそうです。最初は冗談半分で見にいったところ、あまりのかわいさにもらってきたというのです。その頃住んでいたアパートは、もちろんペットを飼うことは禁止されていたので、アルバイト先の人に面倒を見てもらいながら、時々連れて来ていたらしいのです。ペット可のアパートに入居するためには、私が保証人にならなければならないわけですから、そういった意味でネコを飼っていることがわかった（バレた）のでした。最初は、「とんでもない☹」と怒っていた私でしたが、引っ越しの手伝いの時に、そのかわいらしさとツンデレ（普段は無視したようなツンツンした態度を取りながら、時には好意的にデレデレするような態度をとること）ぶりににすっかりはまってしまいました。小さい頃に犬に噛まれそうになったことがあるとはいえ、戌年である私はどちらかといえば“イヌ派”だったのですが、すっかり完全な“ネコ派”になってしまいました。

その息子が、２匹目のネコを飼い始めたのは、一昨年のことです。このことは昨年３月発行の「学校だより希望の鐘№109」に掲載しましたが、読んでいない１年生のために再掲します。

**『そのネコは、スコティッシュフォールドという、耳がたれていることが特徴の大変人気のある種類です。ペットショップで見て“一目ぼれ”で購入したのだそうです。オスですがミルクと言います。息子はいっちーとミルクに同時に同じ分量のエサをあげるのですが、ミルクは自分のエサをものすごい勢いで食べると、すぐにいっちーのところに行き、いっちーのエサも我が物顔で食べます。まるで「おらおら。俺は血統書付きのネコ様だぞっ！おまえみたいな雑種は、俺と同じに食べてるんじゃねえ。どけっ!!」とでも言っているように思えてしまいます。自分のエサまで食べるミルクを、いっちーは一歩引いて、争うことなく見ているような感じです。私としては、いっちーがとても健気（ケナゲ：心掛けがよく、しっかりしていること。弱い者が困難なことに立ち向かっていくさま）に見えます。ですから、余計にいっちーがほおっておけないのです。』**

そして、私が元気だったいっちーを見たのは、ミルクと一緒だったその１年前が最後となりました。

話は変わりますが、私の前任校では、私が赴任した約６年前リンとトトロという２匹の老犬を飼っていました。なぜ飼うことになったかというと、今から20年ほど前の1997年にさかのぼります。学校周辺に住み着いていたリンが保健所に捕獲されそうになっているのを見て、複数の生徒が「待ってほしい」と訴えたのがきっかけだったようです。当初は「しっかり飼うことができるのか」などの不安もあったようですが、結局はリンの飼育を決め、間もなくおなかにいたトトロも産まれました。

（⇨裏へ続きます。）

小中野中学校だより 希望の鐘 ひとつのつぼみは いちどしかひらかない №146 平成31年2月13日発行

（⇨表からの続きです。）最初は、散歩やエサやりなどの世話は生徒が当番を決めて実施していて、エサ代や予防接種の費用は、生徒による募金活動や文化祭でのバザーの売上を充当していました。歴代の卒業アルバムには、必ずリンとトトロの写真も入っていました。私が赴任した頃は、動物好きの先生が「夜にイヌだけ学校に残しておくのはかわいそうだ」と言って、自分の家に連れて帰っていました。中学校でイヌを飼っているのは全国的にも珍しいということで、放送はされませんでしたが、テレビ朝日の「ナニコレ珍百景」という番組が取材に来たくらいです。ただ、子どもの方のトトロは平成26年の12月31日に、母親のリンもその２か月半後の３月13日に死んでしまいました。トトロは17年、リンは19年も生きたことになります。人間で言えば100歳近くだそうです。学校でイヌを飼うことについては、賛否両論（サンピリョウロン：賛成と反対の両方の意見があること）ありますが、中学校において動物を飼うことは、あまり支持されていないように感じます。確かに、かなり大変なことだからです。それでも、20年近くにわたって飼うことができたのは、先輩から後輩へと脈々と受け継がれた「責任」や「誇り」「愛情」があったからだと思います。

いっちーが天国へ行ってしまったことを聞いた翌日、家族と一緒に仙台に行ってお悔やみ（オクヤミ：死を弔うこと）をして来ました。息子にとって家族であったことを思えば、私にとっても同様です。いっちーが大好きだったネコ用おやつを持っていきました。ケンカばかりしていたいっちーとミルク（一方的にミルクが手を出す）ですが、「ここ半年くらい本当に仲がよくなっていたのに」と息子も残念がっていました。臆病ないっちーのお気に入りの隠れ場所はこたつの中なのだそうですが、ミルクはいっちーをさがしているのか、そこにばかりいるようになったそうです。

いっちーが天国に行ったことを息子と悲しんで八戸に戻ったとたん、イヤなニュースが報道されていました。京都市内で８日に撮影され、ツイッターに投稿された映像です。犬を散歩させている黒い服の１人の女性が、犬のおなかのあたりを思い切りけり上げていました。犬は倒れ込み、飼い主を見上げています。その後、再び歩き出しましたが、わずか10秒後、女性はまたしても犬をけり上げました。犬は、ラブラドルレトリーバーで16歳のメスだったようです。ひざに傷があったほか、重度の病気の症状もあったようです。犬をけった飼い主の女性は「虐待とは違います。しつけです。」と言い張っていますが、非難が殺到しているようです。私も、どんな事情があるにせよ、動物を飼う資格はないのではないかと思ってしまいます。唯一の救いは、その犬を動物保護団体が保護したということです。

片やペットの死を心から悲しむ（ほとんどの人はそうだと思います）人がいれば、片や飼い犬を虐待する人もいます。私は、息子がいっちーを飼い始めた時、「動物といえども、命ある生き物なのだから、それを預かる責任は重い。その責任を確実に果たせる者だけが、動物を飼うことが許される」と言いました。息子がいっちーを飼ってから、八戸に戻って来たのは、いっちーを見てくれる人に預けられる時だけ（５年でわずか３回）です。それが、息子の責任の表し方なのかもしれません。みなさんの中にも、家庭でペットを飼っている人はいっぱいいると思います。癒されることが多いのではないでしょうか。ただ、どんな状態になっても、最後まで面倒を見るという覚悟が何よりも大切だということを肝に銘じて（キモニメイジル：心に刻みつけて忘れないこと）くれればと思います。

『いっちー、安らかに。いっぱいの思い出をありがとう！』

**【今日のひとりごと】**

●今日の私の似顔絵は、　年　組の　　くんに描いてもらいました。　　くんに、好きな動物を聞いたら、「犬で、種類は柴犬」ということでした。自ら働くようになって、しかも責任を持てるようになったら、飼えるようになるかもしれないですね。　　くんの所属する男子バレーボール部ですが、一昨日の第41回選抜バレーボール八戸大会において、市中体秋季大会から数えて５つ目の優勝を果たしました。今回は、八戸市内だけではなく、青森市や岩手県、上北地方や三戸地方の学校も参加する、比較的大きな大会でした。しかも、部長で中心選手の　　くんがケガで出場できなかったにもかかわらず、優勝したことがスゴイと思います。　　くんに「やったな」と言ったら、「ぼくは何もしていないですけど」という答えでしたが、それこそチーム全体、ベンチも一体となった総合力の優勝だったのではないかと思います。　　くんは出場できなかった悔しさを、他のメンバーはこの大会で得た自信を、来月の青森市で行われる県選抜の大会で発揮してくれれば、さらにチームとして一回り成長できるのではないでしょうか。